

丑年の牛の話

加本 一久

その1、十二支の由来

朝日新聞の「天声人語」にのっていたおとぎ話を御紹介しよう。

むかし、むかし、造物主の神様がもろもろの動物を集めて云い渡された。「元日の朝、背で私のところにあいさつに来なさい。早いもの勝ちで1等から12等までを入賞とする」と。新年参賀コンクールを発表になった。

動物仲間では大センセーションをまき起した、その中で足ののろい牛が大変気に病んだ、とても犬や馬にはかなわない。トラだの兎にも勝てない、「わたしは牛歩でのろいんだから皆より一足先に出発しよう」というので律儀な牛は大みそかの晩に出発することにした。それをいち早くみつけたのがネズミだった。ノソリと牛が牛小屋から出てゆく時にハリ上からピョンと牛の背にとび乗って知らん顔をしていた。

元日の朝、神様の宮殿には勿論のこと、牛が一番乗りをしていた。ところが門があいたトタン、牛の背に乗っていたネズミがピョンと計り、ジャンプして牛の鼻先から真先きにゴールインした。つまりタッチの差でネズミが牛を出し抜いて第1着となった。千里を走るトラは惜しくも第3着、足に自慢のウサギは途中で居眠りをして第4着となり、馬もイノシシも犬もおくれをとって、あやうく入選した。

そこでその順位は、ネ、ウシ、トラ、ウ、タツ、ミ、ウマ、ヒツジ、サル、トリ、イヌ、イということになった。

この中に不思議なことにはネコが参加していなかった。あとで分ったことだが、ネコがネズミに日取りを聞いたら「正月の2日だよ」と間違った日付を教えられ、それを信じていたネコは見事に落選した。それいらいネコはネズミをうらんで、子々孫々に至るまでネズミを追いかける宿命となったという。

どうです。人間社会にもネズミのようにスバシッコイのが多くて困りますね。又こういうのが一番はびこっていることも似ていますね、「わたしは牛になりたい」なんて堅実で地味な方はいませんか。

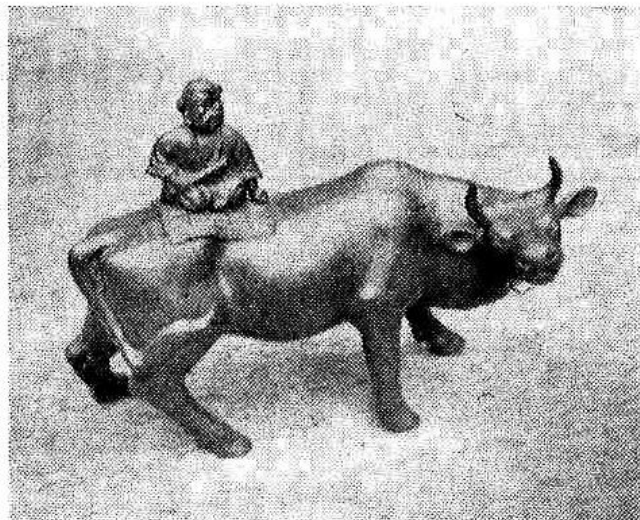
その2、牛と塩

昨年の秋、阿哲郡の共進会が大佐町で開かれた時のことである。

わたしは審査顧問とかの肩書きで出張した。2日目になって朝早やく起きて旅館の玄関に出てみて驚いた。

商店街の戸毎に表通りをきれいに掃き清めて、その上にピラミット型でもの50センチもあろうかと思われる盛り砂を一对宛並べてある。その上にキッチンと塩が盛ってある。それが街道筋にズラリと並んでる風景は正に奇観であった。

私は不思議に思ってそのわけを宿の人に聞いたら、



今日からお祭りで土地の習慣として玄関先を清めるというのだ。つまり神様の御出ましを戸毎に清浄にしてお迎えしようという意味だという。

私は実はこの盛り塩をみて、「流石は、牛の本場だけあって、共進会歓迎、牛をねぎらう意味でやっているのかなあ？ それにしてはチト大げさだな」とも思っていた。

豈図らんや、お祭り用と分った。しかし、これは牛と因縁残らかぬ話がある。

これも昔話にさかのぼる。しかも支那のことである。

かの有名な始皇帝は稀代の精力家であったとか、美姫を擁すること3千人と伝えられているが、これは積々数十人いうところでしょう。

それにしても、大したものでもよくも手綱がさばけ

岡山畜産便り 1961.01

たものと思う。

ところが皇帝自身は多くの美人をかかえて御満悦だったろうが、さて被扶養者側に問題があった。それは順番が仲々廻ってこない。もの足りなさ、もどかしさ、そねみ、というものだったろう。

そうした集団的不満の中にも智えがあった

昔から頭の良いのは色々考える、工夫するものである。

或る後宮の1人が思いついたことはそうである。皇帝は館を巡る時は牛車に乗っておでかけになる。この車をおとどめするには先ず「将を得んと慾すれば馬を射よ…」の諺通り、牛を引寄せるに限ると、牛の大好物には塩が良い。というので牛車がお通りになる頃を見はからって門口に盛り塩をしていた。

そこへ、ゴトゴト牛車が現われる。牛は天角地眼と云って、地面を向いてノッシノッシと歩くものだ、イチ早く好物の塩を見つけたからたまらない。止める力もふり切ってペロリペロリとやり出す。そこへ件の女がえたり賢こしとばかり嫺々現われる、皇帝はイブカシがって簾を上げて見ればこの始末、エン然として招かれてみれば、満更ら知らぬ仲でもない、「据膳食わぬはチンの恥」というのでやをらおみ腰を上げ給うと云った結末になったとか。めでたしめでたしである。

これももとはと云えば牛を塩で釣ったわけである。それいらい、水商売の店先きにお客を招く、招じ入れる、延いては商売繁昌というマジナイが伝えられたと云う。

かくの如く牛と塩は誠に因縁残からぬ物語りを生んだ。

話はふり出しに戻る。

私は大佐町の盛り塩が牛の共進会でこの故事に倣って牛を招き、それが大佐町の産業や商売の繁、を結びつけたかと思った。

それはこの共進会の行事としては直接に当らなかつたようだが、矢っぱり相通ずるものがある。神様の御通りをお迎えし、玄関先を清めていわゆる福を我が家に招き入れるという意味では全く同じで、これは牛の共進会とは決して無縁のものではないと面白く感じた次第。

その3、黒いものなら

「黒いものなら阿哲へおいで……」というのがある。あとの文句は牛と炭が日本一の名物だと自慢している。

私が曾って千屋に赴任した際、歓迎会の席上でこの文句を引用し御挨拶した。

それは黒いものがもう1つ加わった。「私は黒さでは日本一と迄はウヌボレないが、これで千屋の名物は三拍子揃ったから安心してくれ」と云ったら、皆ニヤニヤし乍らソウダソウダと云ったような眼つきだった。

その場長が2年程で転任となった。これで名物が1つ減ったわいと思っていたら、そこはうまくしたもので、入れ換りが前に勝るとも劣らない程の名物が据った。

これでヤレヤレと思ってるのは地元の人達だろう。黒いもので自慢するタネは安泰であるからである。

それはさておき、この間、本県の3場長が寄り合った時である。全く噂通り3人とも黒い。

他県の人が不思議がっているのも無理はない。

「大体、岡山の場長には、黒い者でなきあ、なれないのか？ 和牛の黒いのは分るが、乳牛なら黒白か、白黒だ、鶏に至っては真っ白なが当り前なのに、態々反対の警戒色だ。どうも分らんねえ……」といった具合だ。

これは何も云い訳の必要はない。世の中には色々な色が話題になる。

「あれは赤だ」桃色がどうか、褐色の弾丸は良いとしても腹が黒いなんてのは香しくない。又は黄金色の波、みどりなす山などの形容もある。犯罪容疑をかけられて「黒か白か」とも云う。或る政治家は「白さも白し富士の白雪」だなんてオドケタことを云った。

ところがものの味についてはどうも黒の方に歩がありそうだ。

俗に「1、黒・2、赤、……」と云うのは定説だ。それもそのはず、栗だって皮が黒くならなきあ熟れてないし、西瓜のタネも白い時はうまくない。

この間スキ焼をつつき乍らいいことを聞いた。

「糸コンニャク」を入れようとしたら、馬鹿に黒い。私は「糸コンニャク」は白いのが良いと思っていた

岡山畜産便り 1961.01

ので「こりゃえらい黒いじゃないか」となじり顔で聞いたものだ。そしたら「旦那さん、コンニャクは黒い程良いんですよ。コンニャク玉が多い程黒いもんですよ……」

「ウソだと思ったら味ってみてごらんなさい」

と女の人が云った。

コンニャクにして然り、古今東西、黒いものには味の悪いものはないということを、汗をふきふき紹介しておく。